

市町村職員自主研究グループ支援事業

ワク育 にしもろプロジェクト
～楽しく学べる地域へ～

西諸地区自主研究グループ
(小林市、えびの市、高原町職員グループ)

研究テーマ：ワク育にしもろプロジェクト～楽しく学べる地域へ～

1. 【グループの概要】

小林市、えびの市、高原町の2市1町で「にしもろ定住自立圏共生ビジョン」を策定しており、圏域で抱える共通の諸課題等を解決するため、2市1町合同で調査を行う「ふるさと再生合同調査研究事業」を実施している。今回、それぞれの市町から2名ずつ計6名の職員でチームを結成し、上記研究テーマで調査研究をすることとなった。

2. 【研究の目的、ねらい】

人口減少・人口流出が全国的な課題。特に地方では、急激に進んでいる状況であり、西諸地域でも例外ではない。

人口流出と聞くと、特に若者が高校卒業後、進学や就職で都会に流出しているイメージがあるが、実際は高校進学時点で若者が流出している現状がある。西諸地区では地区内に3つの県立高校があるが、いずれも定員割れをしており、約3割は地区外の高校に進学している状況となっている。

そこで、魅力的な地域にすること（学びたい・学ばせたい・教えたいと思える地域を目指す）、郷土愛の醸成（子どもが大人になったとき西諸に関わりたいと思える人へ育てる）の2つを政策の目指す未来像に設定し、研究を実施した。

3. 【活動内容】

当初の事業計画では、次の4つの取組を実施することとし、活動を開始した。

- (1) 竹とんぼ×ドローン教室
- (2) ショート動画コンテスト
- (3) アンケート調査
- (4) 先進地視察

このうちショート動画コンテストについては、審査会で「まずはSNSの使い方をしっかり学ばせる必要があるのでは?」「地域を探索する、住民と関わるなどの工夫が必要」などの意見があったため、その意見を参考にし、コンテスト形式ではなく、地元で動画制作を生業としている方を講師に招き、動画の作成の教室を実施することとした。それぞれの実施内容については下記のとおりである。

(1) 竹とんぼ×ドローン教室

【イベント概要】

実施日：令和4年11月13日（日曜）13時～17時

場 所：小林市南地区体育館

参加者：西諸管内の小学5・6年生とその保護者

講 師：竹とんぼ教室：高原町内でボランティア活動している「男
の生きがい教室」の会員6名

ドローン教室：ライフクリエイト宮崎株式会社2名



【実施内容】

竹とんぼとドローンのどちらも「揚力」で飛ぶという共通点に着目し、昔の遊びである竹とんぼと、最先端技術を利用しているドローンを組み合わせた教室を開催。子どもだけでなく、一緒に参加する保護者もわくわく学ぶことを目的とした。

●第1部（竹とんぼ教室）

実際に小刀を使って竹材を削り飛ぶように調整を行った。講師に小刀の使い方や、削り方のコツ、飛ばし方まで丁寧に指導いただいた。子ども達は自分で削った竹とんぼを体育館で飛ばすことができた。

●第2部（ドローン教室）

ドローンの解説の後、子ども達全員でトイドローンの飛行体験を行った。産業用ドローンのデモンストレーションも実施。

【アンケート結果】

イベント終了後には参加者アンケートを実施し、子どもは7名中6名が楽しかったと回答した。竹とんぼやドローンが楽しかったという意見が多かったが、お父さんに竹とんぼの作り方を教えてもらえて楽しかったという意見があり、親子の触れ合いの場にもなった。保護者からは、「久しぶりに竹とんぼを作って楽しかった」、「興味があっても普段触れることのないドローンを見ることができ、子どもの将来にも役立つと思った」、「将来子どもにドローンの免許取らせます」、な

どの意見があった。

また、今後どのようなイベントに参加したいか（複数回答可）については、①専門家による教室（5票）、②農業体験（4票）、③大学生による教室（3票）となった。

【今後の課題】

10組の定員は早い段階で定員に達したが、当日は7組の参加となった。教室前日にリマインドのメールを送ったが、欠席の3組については特に連絡もなかった。早い段階で定員に達したこともあり、募集の段階で当日キャンセル分も見越して定員より多めに募集すれば良かった。男の生きがい教室に当日使用する竹材の準備をお願いしたが、伐採から日にちが経ち、水分が抜けたことで竹が硬くなっており、子ども達は小刀で竹を削るのに苦労していた。事前に運営側が体験し、検証する必要があった。

【所感】

昔ながらの遊びと現代の新技术を組み合わせた教室を開催したことにより、子どもはもちろん、大人もわくわく学ぶ事ができた。

また今回、竹とんぼ教室の講師をお願いした「男の生きがい教室」との打ち合せの中で、「そば作り」も行っていることを聞いた。今後の案として、そばの植え付け、収穫、そば打ち体験に子ども達も参加させてもらうことで、単発のイベントではなく、通年のイベントができると考えた（農業体験×食育×地域の高齢者との交流）。

（2）ショート動画作成教室

【イベント概要】

実施日：令和4年11月12日（土曜）14時～17時

場 所：小林市コワーキングスペース TENOSSE

参加者：小林高校生1名、小林西高校生7名

講 師：池上 翔氏



【実施内容】

TikTok でバズる動画の作り方についての教室を行った。講師は、YouTube などを中心に、企業などの動画制作を生業として活動している池上翔氏。教室は、①分析（どんな動画がバズっているか）→②企画・制作（3 班に分かれて）→③発表の流れで行った。

【参加者アンケート】

アンケートを実施し、8 名中 8 名が参加して良かったと回答があった。また、今後どのようなイベントがあったら参加したいか聞いたところ、「1 位西諸について学ぶイベント」「2 位農業体験」「3 位西諸の仕事について学ぶイベント・大学生による教室・専門家による教室（IT・金融・プログラミング・デザインなど）」という結果になった。

【今後の課題】

今回のイベントで、参加者の満足度は高かったものの、率先して申し込んでもらうためには、実施内容はもちろんのこと、学校との連携や周知方法などの仕掛けが必要だと感じた。

【所感】

今回の教室では、分析する力・考えて作る力・説明する力を身につけることを目標に教室を進めた。高校生の興味関心が高い事項と市内で実際に働く人を講師としたことで、地域で学校では学べないことを教えられる機会を創出できた。

（３）アンケート調査

生徒向け、一般（大人）向けの２種類のアンケートを実施した。
実施方法は QR コードを読みとりグーグルフォームでの回答とした。

【生徒向けアンケート】

対 象：中学３年生（小林・三松・飯野・高原中学校）248 名
期 間：令和４年 10 月 28 日から令和４年 11 月 28 日
回答方法：デジタル教育の一環として各校が配付し、生徒が一人一台所持しているタブレットでの回答とした。
内 容：高校進学に関する調査。詳細は次表のとおり。

質問番号	質問項目
Q1	あなたの学校がある地区を教えてください。
Q2	あなたの性別を教えてください。

Q3	高校に進学する予定がありますか。
Q4	もしあなたが高校に進学するとしたら、進みたい学科はどれですか。
Q5	あなたは西諸の高校に進学したいですか。
Q6	(はい) と答えた方にお聞きします。西諸の高校に進学する理由を教えてください。(複数選択可)
Q7	(いいえ) と答えた方にお聞きします。西諸以外の高校に進学する理由を教えてください。(複数選択可)
Q8	高校卒業後どのような進路に進みたいと思っていますか。
Q9	現在、学習塾や通信教育などを利用し、学校以外で勉強することがありますか。
Q10	中学校卒業後の進路について、誰によく相談しますか。
Q11	将来の夢を教えてください。

約6割の生徒が西諸の高校に進学したいと回答。通学が便利という理由が8割であった。西諸以外の高校に進学する理由としては、いきなり進みたい学科があるという理由が5割であった。

また、Q2及びQ10のクロス集計表によると、男女ともに半数以上が進路は親や親族に相談している。

(Q2 及び Q10 のクロス集計表)

		Q10中学校卒業後の進路について、誰によく相談しますか。							合計
		SNS	み～んな。	学校の先生	塾の先生	親や親族	特に相談しない	友達	
Q2性別	男性			4	1	62	30	26	123
	女性	1	1	7	1	72	17	20	119
	回答しない					4		1	5
	その他					1			1
合計		1	1	11	2	139	47	47	248

【一般（大人）向けアンケート】

対 象：小林市、えびの市、高原町の各職員 110 名

回答期間：令和4年11月14日から令和4年12月15日

回答方法：各自スマートフォンで回答

内 容：高校に対する印象（イメージ）調査及び西諸の教育に求められているニーズ調査。詳細は下表のとおり。

質問番号	質問項目
Q1	現在お住まいの地域を教えてください。
Q2	あなたの年齢を教えてください。

Q3	あなたの性別を教えてください。
Q4	あなたは現在結婚していますか。
Q5～Q12	西諸管内にある高校（小林高校 小林秀峰高校 飯野高校 小林西高校）にどのような魅力を感じていますか。（プラスイメージ）
	西諸管内にある高校（小林高校 小林秀峰高校 飯野高校 小林西高校）にどのような魅力があればより魅力的になると感じますか。（マイナスイメージ）
以下任意回答	
Q13	西諸ならではの教育とはご意見をお聞かせください。
Q14	楽しく学ぶために必要なことはご意見をお聞かせください。
Q15	郷土愛の醸成に必要なものについてご意見をお聞かせください。

高校に対する印象（イメージ）調査について、西諸管内の高校それぞれに、居住地・年代・性別・婚姻有無に関係なく、全体として共通のプラス、マイナスイメージがある。一方で、イメージそのものがわからないとの回答も目立った。また、西諸の教育に求められていることとして、「自然・地域密着型・教える側も興味を持つ」、楽しく学ぶために必要なこととして、「自主性の尊重」、郷土愛の醸成に必要なものとして、「幼い頃からの教育」といった言葉が複数見られた。

（４）先進地視察

視察日：令和４年１２月１０日（土曜）

視察先：一般社団法人 未来の大人応援プロジェクト
代表理事 岸川 政之氏



高校生レストランの仕掛人でもある岸川氏にＳＢＰ（※）の取り組みと効果を学び、西諸地区の若年層流出の解決の手がかりを得ることを目的とした。視察内容は、三重県と協力し作成する三重県自殺対策ＣＭ検討会への参加、三重県立相可高等学校食物調理科の生徒が運営する高校生レストラン「まごの店」視察及び昼食、岸川氏によるＳＢ

Pをはじめとした自身の取り組みについて講義及び意見交換であった。

(※) S B P (ソーシャルビジネスプロジェクト)

高校生が地域資源（ひと、モノ、自然等）と交流し地域の課題をビジネスの手法を用いて解決する取り組み。その取り組みを地域で応援し支えていく取り組みのこと。

4. 【研究の成果、効果】

今回の研究では、高校の定員割れ解消を目的に自治体として何ができるかを調査・検討した。その方策の1つとして、まず西諸地区で楽しいことを学べる機会を創出することを考え、試験的に2つのイベントを実施した。その結果、参加者の満足度の高いイベントを実施することができた。参加した子どもたちにとっては、それぞれ地元で活動する人を先生として迎えたことで、普段学校で学べないことを体験できた。また、参加者アンケートを実施することで、今後どのようなイベントを実施していくと効果的か知ることができた。

生徒向け、一般（大人）向けの2種類のアンケート結果から、高校生からの人口流出を防ぐためには、西諸でも生徒が学びたいと思うことが学べる環境をつくること、また生徒だけでなく保護者等の大人に向けた高校の魅力発信が必要である。ここに関しては、各自治体の広報紙などを活用することも手段ではないかと考える。

視察した先進地では、先輩から後輩へS B Pの取り組みを伝統として受け継ぐことで、高校生をはじめとした若年層の郷土愛を醸成していた。地域課題については、行政主導で解決するのではなく、地域が一体となって地域課題を解決することが重要である。そのために、行政の役割として、住民が地域課題を自分事として捉えるような機会や学びの場の創出が求められている。

5. 【まとめ】

第一に、西諸を魅力的な地域にすることについて、西諸独自の教育には、自然を生かすこと、地域に密着すること・教える側も興味を持つことが求められている。イベント参加者アンケートでも西諸の基幹産業である農業を体験したいと回答した割合が高かった。

第二に、郷土愛の醸成について、視察先では、先輩から後輩へS B Pの取り組みを伝統として受け継ぐことで、高校生をはじめとした若年層の郷土愛の醸成へつながっていた。また、郷土愛の醸成に必要なことは何かとの質問に「幼い頃からの教育」という回答があったこと

からも、郷土愛の醸成には長年にわたる継続した取組が不可欠である。継続するためには、楽しさが重要であり、今回の研究テーマであるワクワク育、ワクワクする教育という方向性は郷土愛の醸成のために適切であるといえる。

第三に、ワクワクする教育、すなわち楽しく学べる地域になるためには、地域の住民一人一人が自主性をもち、地域が一体となって継続した取組を行う必要がある。取り組むきっかけを、行政が企業や地域団体等と連携して創出することが大切である。住民が自主性を持って取り組むためにも、住民の需要や意向を把握し、周知や広報を行うことが重要である。

また、対象が特に子どもの場合は、参加したことで将来の可能性が広がるような取組を行う必要がある。その取組の対象に子どもだけではなく、子どもの将来の選択に大きな影響を与えている親を引き込むことで、さらに子どもの将来の選択が広がるのではないかと考える。

ワクワクする教育を西諸地域全体で長期にわたり継続して行うことが、郷土愛の醸成や西諸の魅力へとつながる。

最終的に、ワクワクする教育から、高校生がワクワクしながら地域の未来を考えてSBPに取り組んでいた視察先のように地域課題を行政主導ではなく、地域全体が一体となって解決するところまで発展していくことを目標としたい。

今回実際にイベントを実施したことにより、講師となった地域住民の方の研究テーマの趣旨への理解を得ることができた。また、イベント実施の際の改善点や課題、子どもや親の需要が把握できた。これらは次回イベントを行う際に、参考になる資料となった。郷土愛の醸成、将来的には、視察先のように地域が一体となって課題を解決できるようになるためにも、今後も継続した取組を行いたい。

最後に、今回、西諸地区という同じ区域ではあるものの所属する自治体異なる職員が集まり、1つの自主研究テーマに約1年間取り組んだことは、大変貴重な経験となった。課題の解決にむけ、協働するうちに、構成員も一緒になってワクワクしながら楽しく学び、構成員間の親交を深めることができた。今回の経験は、今後、自治体の枠を超えた地域課題が出てきた際、円滑に連携し課題解決に向けて取り組む自信につながった。